

基礎看護技術を学習する看護学生の自己教育力に影響する要因の分析

今村圭子¹⁾, 山口さおり¹⁾, 中俣直美¹⁾, 田中久美子¹⁾, 松成裕子¹⁾

本学では2年次に基礎看護共通技術は30時間、基礎看護技術は90時間を開講している。基礎看護学で教授すべき内容を担保しつつ、学生の現状をふまえ、看護技術の教授内容の精選を常に検討し、学生には復習・予習を兼ねた小テスト、事前学習の提示、演習課題の学生によるプレゼンテーションなどを導入し能動的学習姿勢への転換を試み、少しずつではあるが、学生の学習姿勢の変化を感じている。上記の学習体制を基盤に、看護実践能力の育成に向けての示唆を得るため、基礎看護共通技術・基礎看護技術を受講する学生を対象に、経時的に学習活動自己評価、自己教育力評価を行い学生の学習状況を「見える」化し、さらにリフレクションする力をつけることで、自己教育力を育成し、さらには看護実践能力の素地を養うことにつなげたいと考え、年間4回自己教育力評価、学習活動自己評価（演習）を実施予定であり、現在2回目終了した。自己教育力とは、梶田により「自分自身で学び、成長、発展してゆける力」と定義されている。今回、中間評価として前期2回実施した自己教育力評価と11回実施した小テスト及び期末試験の結果との関係を分析した結果、自己教育力の要因として小テストであることが示唆されたので報告する。

キーワード：自己教育力、基礎看護技術、看護学生、小テスト

はじめに

わが国では医療技術の進歩、少子高齢化の進展、社会ニーズの多様化などを背景とし、高度な専門知識、高い倫理観、優れた実践能力を備えた看護師の育成が求められている。看護学生が卒業後に、適切な判断のもとに看護を実践するためには、学部教育における基礎教育から能力を磨く必要があると考える。言い換えると、教員は、学生が自ら考え習得した知識を活用できる学習の仕方や、自立的、自律的で、自ら学びとる能力や態度等、自己教育力を身につけられる教授方法を考えることが大切であり、学生自身も能動的な学習姿勢を身につけていくことが必要であると考えられる。しかし、安ヶ平ら¹⁾は看護学生の特徴として、「読み書きや理解力の低下」「主体的な学習態度に欠ける」「知識を関連づけたり、活かすことができない」などと述べている。つまり、看護学生は学習し得た知識を活かすことができず、受容的学習

態度であるという特徴があるということである。

本学では2年次に基礎看護共通技術は30時間、基礎看護技術は90時間を開講している。この科目は生活者としての対象への尊厳や安全・安楽・自立を考慮しながら援助を実施するための基礎的知識・技術・態度を習得することを目的とし、日常生活の援助や診療の補助等の看護技術の基本となる科目である。この120時間という膨大な時間、学生は看護技術に関する知識の獲得に始まり、技術・態度の修得に向けて学習活動を行い、生活者としての対象を理解し、看護職者として成長して行く。我々教員も、学生たちがこの科目を通して、必要な原理・原則および科学的根拠の知識に基づいて、適切なケア行動がとれることを目指し教授する。その相互作用の中で、学生達は技術演習後の自己評価を行うことで自分を客観視する力を養い、自分の行動特性を知る。それにより学生達は、自己教育力を養うことができるようになるもの

¹⁾ 鹿児島大学学術研究院医歯学域医学系 総合基礎看護学講座
連絡先：今村圭子
〒890-8544 鹿児島市桜ヶ丘8-35-1
Tel/Fax: 099-275-6809
E-mail: keiko-21@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

と、看護技術を担当する教員は考えている。

また、これまで過密なカリキュラムの中、基礎看護学で教授すべき内容を担保しつつ、学生の現状をふまえ、常に看護技術の教授内容の精選を検討してきた過程の結果を報告してきた^{2)~4)}。そして、学生に復習・予習を兼ねた小テスト、事前課題学習の提示、演習課題の学生によるプレゼンテーションなどを導入し能動的学習姿勢への転換を試みたことで、少しずつではあるが、学生の学習姿勢の変化を感じている。

上記の学習体制を基盤として、看護実践能力の育成に向けての示唆を得るために、経時的な学習活動自己評価、自己教育力評価を行い学生の学習状況の「見える」化を試みている。さらにリフレクションする力を身につけることで、自己教育力を育成し、看護実践能力の素地を養うことにつなげたいと考え、前述の評価を計画し、現在2回実施した。

この自己教育力とは、1983年代中央教育審議会において「主体的に学ぶ意思、態度、能力であり、学習への意欲、学習の修得、学習を続ける意思とする」と提唱されたことが始まりであり、その後、梶田⁵⁾により「自分自身で学び、成長、発展してゆける力」と定義された。自己教育力に関する研究は、1990年代より行われているが、看護学生を対象とした報告より看護師を対象とした報告が多くされている。ここでは過去5年間の自己教育力に関する先行研究を概観するため、医学中央雑誌Webに「自己教育力」をキーワードとして、2012年以降に発表された総説、原著論文に絞り検索した。その結果、40件が該当したが看護学生を対象としたものは1件であった。その沼口ら⁶⁾の報告によると、看護専門学校1年生を対象に質問紙調査を行った結果、自尊感情が学習動機づけの「内発的調整」「同一化的調整」、自分なりの達成基準への到達を目指す「自己充實的達成動機」が高い学生は自己教育力が高く、明らかに外的なものによって行動が生起する「外的調整」が高い学生は自己教育力が低いことを明らかにしている。2012年以前の研究においても、看護学生を対象とした自己教育力に関する研究の報告は少ない。しかし、看護実践能力の低下が問題となっている状況を踏まえると、自己教育力、つまり主体的に学ぶ意志、態度、能力を高めることは、学習への意欲、学習の修得、学習を続ける意志を継続する能力を獲得することであり、基礎教育において重要な意味を成すと考える。看護学生が卒業後も適切な判断のもとに看護を実践するには、学生生活中から能力を磨き続けなければならないと考えられる⁷⁾。

今回、中間評価として前半期に2回実施した自己教育力評価と、前期11回実施した小テスト及び期末試験の結果との関連を分析したので報告する。

目的

基礎看護共通技術・基礎看護技術を受講する2年次生を対象に実施した自己教育力評価と小テスト及び期末試験結果の関連性を分析し、自己教育力に関係する要因を明らかにすることである。結果を基に、現在実施している事前課題学習、演習後のリフレクション等との関係性を分析し今後の教育的示唆を得る。

用語の定義

自己教育力とは、自ら学び自己を成長させていく力である⁵⁾。

学生の学習状況

1. 履修内容

「基礎看護共通技術」「基礎看護技術」における看護技術の基本原則である「安全」「安楽」「自立」、そして「生活者としての対象理解」を基盤に、人間の生理的なメカニズムや日常生活との関連などの技術が持つ性質と、技術を提供する対象の健康レベルの観点から分類・整理し、教授・学習の順序性を踏まえて構造化した内容を図1に示す。これは、1年間で履修する内容であり、1回目の調査時までに履修した科目は「共通技術」のコミュニケーションの技術、フィジカルアセスメントの技術、感染予防の技術である。調査2回目（8月の期末試験時）の実施時は、「共通技術」と「生活環境を整える技術」「運動・活動・休息を援助する技術」「衣生活の援助技術」および「身体の清潔への援助技術」である。

2. 事前課題学習

各単元の学習目標に沿って、学習内容を受講する1週間前に提示する。学生は各々のノートに後の学習活動にも活用できるように工夫しながら学習を行う。

研究方法

1. 調査対象

本学医学部保健学科看護学専攻2年次生78名とした。

2. 調査期間及び調査方法

2017年6月（講義終了後）と8月（期末試験終了後）、各々調査票を配布し、調査の目的及び方法を説明した。調査票は無記名とし、所定の箱に入れてもらい回収した。

3. 調査内容

1) 自己教育力

梶田⁵⁾が作成した30項目から構成されている「自己教育力調査」に、西村ら⁸⁾が追加した10項目を加えた計40

学習 進度	学習のテーマ	単元	学習内容(演習項目)	実技試験	
難 易 ↓ 難	共通技術	コミュニケーションの技術, ボディメカニクス, 観察・記録・報告の技術, 学習支援の技術		実技試験	
	I	生活者としての 対象(人間)を 知る	コミュニケーションの技術 (再掲) フィジカルアセスメントの技 術	効果的なコミュニケーション, 観察 バイタルサインの測定, 意識状態の観察	血 圧 測 定
	II	環境を整える	感染予防の技術 生活環境を整える技術	衛生的な手洗い 個人防護用具の使用, 医療廃棄物の分別 病床環境の整備 ベッドメーカー, シーツ交換	ベ ッ ド メ ー キ ン グ
	III	基本的ニード を充足する	運動・活動・休息を援助する 技術 (*:安楽確保の技術) 衣生活の援助技術 身体の清潔への援助技術 栄養と食生活への援助技術 排泄の援助技術	ポジショニング*, 体位変換, 床上移動 車椅子・ストレッチャーによる移乗・移送 睡眠のアセスメント 寝衣交換 全身清拭, 陰部洗浄, 洗髪, 足浴, 爪切り, 口腔ケア 食事介助, 摂取状況と栄養状態のアセスメント 床上排泄(便器・尿器)	手 浴
	IV	健康の回復を 促す	排泄の援助技術(再掲) 感染予防の技術(再掲) 創傷管理の技術 呼吸・循環を整える技術 (*:安楽確保の技術) 与薬に関する援助技術 検査に関する援助技術	グリセリン浣腸, 一時的導尿 滅菌物の取り扱い, 滅菌手袋の装着 無菌操作 創傷処置 酸素吸入, 酸素ボンベの操作, 口腔・鼻腔内吸引 電法* 直腸内与薬 皮下注射, 筋肉内注射, 点滴静脈内注射 静脈血採血	滅 菌 手 袋 の 装 着 無 菌 操 作

図1 「基礎看護共通技術」「基礎看護技術」教育内容

項目からなる「自己教育力調査」を用いた。

この尺度は4側面により構成されており, 第1の側面は「自分がやり始めたことは, 最後までやり遂げたい」「自分の能力を最大限に伸ばすように, いろいろ努力したい」など10項目から成る「成長発展への志向(側面I)」である。第2の側面は「他の人から欠点を指摘されると, 自分でも考えてみようとする」「自分の良いところ悪いところが良く分かっている」など10項目から成る「自己の対象化と統制(側面II)」である。第3の側面は「考えを深めたり, 広げたりするのに話し合いの討議をすることを大切にしている」「自分の調べたいことについて文献検索していくことができる」など10項目から成る「学習の技能と基盤(側面III)」で, 第4の側面は「今のままの自分ではいけないと思うことがある」「ときどき, 自分自身が嫌になることがある」などの10項目から成る「自身・プライド・安定性(側面IV)」である。回答方式は「はい」「いいえ」の2件法とし, 「はい」= 1点, 「いいえ」= 0点を配点とし回答を求めた。反転項目に関しては「はい」= 0点, 「いいえ」= 1点とした。

2) 小テストおよび期末試験

小テストは講義前, 5分間で実施する。当日学習する

単元に関して, 事前に提示した課題学習の内容を中心に10問で構成し10点満点とした。出題の形式は○×やカッコの中に語句を記入するものであった。期末試験は前期学習したすべての単元の中から構成され, 100点満点とした。

4. 分析方法

統計解析ソフト IBM SPSS statistics 23 Windows を用いて下記の分析を行った。

- 1) 自己教育力の全項目の平均値および標準偏差を算出した。
- 2) 自己教育力の4側面それぞれの平均値および標準偏差を算出した。
- 3) 毎授業時間を実施している小テストの合計点, 前期末試験の筆記試験の結果および小テストと前期末試験の筆記試験の合計点と自己教育力の4側面の関連性を Pearson の相関係数にて算出した。
- 4) 自己教育力1回目と2回目の評価と小テストの合計点, 期末試験の点数および小テストと期末試験の合計点を比較した。

表1. 自己教育力の各項目の平均値及び標準偏差

自己教育力の側面	項目	1回目	2回目
I 「成長・発達への志向」	1. 自分がやり始めたことは、最後までやり遂げたい。	0.94±0.23	0.90±0.30
	2. 自分の能力を最大限に伸ばすよう、いろいろ努力したい。	0.98±0.14	0.97±0.18
	3. これからもよい仕事をし、多くの人に認められたい。	0.94±0.23	0.97±0.18
	4. これから専門的な資格や学位などを取りたい。	0.96±0.19	0.95±0.22
	5. たとえ認められなくても、自分の目標に向かって努力したい。	0.85±0.36	0.87±0.34
	6. ぼんやりと何も考えずに過ごしてしまうことが多い。	0.42±0.50	0.38±0.49
	7. 将来、他の人から尊敬される人間になりたい。	0.91±0.30	0.88±0.32
	8. 自分でなければやれないことをやってみよう。	0.85±0.36	0.80±0.40
	9. 一体何のために勉強するのだろうか、といやになることがある。	0.36±0.48	0.35±0.48
	10. 人の人生は結局偶然のことで決まると思う。	0.47±0.50	0.45±0.50
II 「自己の対象化と統制」	11. 他の人から欠点を指摘されると、自分でも考えてみようとする。	0.98±0.14	0.95±0.22
	12. 自分のよいところと悪いところがよくわかっている。	0.66±0.50	0.72±0.45
	13. 腹がたつてもひどいことを言ったりしないように注意している。	0.85±0.36	0.82±0.39
	14. 疲れているときには、何もしたくない。	0.38±0.19	0.07±0.25
	15. 自分のよくないところを自分で考え直すよう、いつも心がけている。	0.90±0.35	0.85±0.36
	16. テレビを見てしまって、勉強がやれないことが多い。	0.38±0.50	0.45±0.50
	17. いやになった時でも、もうちょっとだけ、もうちょっとだけと、頑張ろうとする。	0.64±0.48	0.60±0.49
	18. できるだけ自分を抑えて、他の人と合わせようとしている。	0.87±0.48	0.73±0.46
	19. ちょっといやなことがあると、すぐ不機嫌になる。	0.68±0.47	0.70±0.46
	20. 自分の考えた行動が批判されても腹を立てない。	0.66±0.48	0.65±0.48
III 「学習の技能と基盤」	21. 考えを深めたり、広げたりするのに話し合いや討議することを大切にしている。	0.70±0.46	0.72±0.45
	22. 自分の調べたいことについて文献検索していくことができる。	0.53±0.50	0.52±0.50
	23. 取り組みたいことによって、それにあった学習方法や手続きを調べる。	0.64±0.48	0.63±0.49
	24. わからないことがあると、すぐ人に聞く傾向がある。	0.87±0.34	0.68±0.47
	25. 自己評価するときには、自分の目標に照らして行っている。	0.60±0.49	0.65±0.48
	26. 考えていることを筋道を立てて書いたり、伝えたりできる。	0.57±0.50	0.58±0.50
	27. 自分の調べたいことがある時に図書館を利用している。	0.25±0.43	0.30±0.46
	28. たとえ話もちいて人にわかりやすく、説明することが苦手である。	0.37±0.50	0.37±0.49
	29. 他人の話を聞いたり本を読むとき、内容を振り返りまとめてみる習慣がある。	0.45±0.50	0.52±0.50
	30. 自分に必要な文献や記録を分類・整理しておく習慣がある。	0.42±0.50	0.43±0.50
IV 「自信・プライド・安定性」	31. 今のままの自分ではいけないと思うことがある。	0.19±0.14	0.03±0.18
	32. ときどき、自分自身が嫌になる。	0.38±0.17	0.12±0.32
	33. 自分のことを恥ずかしいと思うことがある。	0.34±0.13	0.13±0.34
	34. 今の自分が幸せだと思う。	0.45±0.72	0.73±0.45
	35. 自分にもいろいろ、取り柄があると思う。	0.46±0.70	0.77±0.43
	36. 生まれ変わるとしたなら、やはり今の自分に生まれたい。	0.49±0.40	0.47±0.50
	37. 他の人にばかにされるのは、がまんができない。	0.60±0.49	0.47±0.50
	38. 今の自分に満足している。	0.32±0.47	0.30±0.46
	39. 自分のやることに自信を持っている方だと思う。	0.36±0.48	0.28±0.45
	40. 何をやっても駄目だと思う。	0.79±0.41	0.73±0.45

5. 倫理的配慮

調査対象に口頭と文章を用いて、研究の目的、調査内容、調査方法、無記名であること、参加は自由意志であり不参加であっても不利益を受けないこと、成績に一切関係しないこと等について説明を行い、自己決定の権利を保障した。調査票の回収をもって、同意を得たと判断することを調査票に明記した。尚、本研究は鹿児島大学医学部倫理審査委員会の承認（承認番号405）を得て実施した。

結果

保健学科2年次生78名を対象として調査を実施した。

1回目の回収率は73.1%、2回目は85.9%であった。1、2回目とも全質問項目に回答があったものを分析対象と

した。自己教育力尺度の信頼性を示す α 係数は1回目.730、2回目は.732であり、2回ともに信頼性は確保されていた。

1. 自己教育力の全項目の平均値と標準偏差

1回目と2回目の自己教育力の全項目の平均値および標準偏差を表1に示す。1回目より2回目の平均値が高い値を示した項目は、側面I「成長・発達への志向」の中において、「これからも良い仕事をし、多くの人に認められたい」「たとえ認められなくても、自分の目標に向かって努力したい」であった。側面II「自己の対象化と統制」では、「自分の良いところと悪いところが良くわかっている」であり、側面III「学習の技能と基盤」では、「考えを深めたり、広げたりするのに話し合いや討

表2 自己教育力の4つの側面の平均値及び標準偏差

自己教育力の4つの側面	1回目	2回目
成長・発達への志向	7.68±1.58	7.52±1.32
自己の対象化と統制	6.66±1.60	6.53±1.49
学習の技能と基盤	5.40±2.21	5.40±2.24
自信・プライド・安定性	4.21±2.17	4.03±2.12

表3 自己教育力の4つの側面と小テスト・期末試験との関連

	自己教育力評価	成長・発達への志向	自己の対象化と統制	学習の技能と基盤
小テスト	1回目	-.067	-.049	-.034
	2回目	.162	.112	.076
期末試験	1回目	.067	.176	.008
	2回目	.124	-.032	.186
合計点数	1回目	.154	.130	-.026
	2回目	.135	-.041	.092

注) 小テスト：前期に実施した11回の合計点，合計点数：小テストと前期末試の合計点数
Pearson 相関係数 *p<0.05

表4 小テストの総合点と4側面「自信・プライド安定性」との関連

	今のままの自分ではいけないと思うことがある。	ときどき、自分自身が嫌になる。	自分のことを恥ずかしいと思うことがある。	今の自分が幸せだと思う。	自分にもいろいろ、取り柄があると思う。
小テスト	.078	.085	.120	.153	.207
	.180	.101	.073	.291*	.068

注) 小テスト：前期に実施した11回の合計点 Pearson 相関係数 *p<0.05

議することを大切にしている」「考えていることを筋道を立てて書いたり、伝えたりできる」など5項目であった。側面Ⅳの「自信・プライド・安定性」は、「今の自分が幸せだと思う」「自分にもいろいろ取り柄があると思う」であった。反転項目である「成長・発達への志向」の下位項目の「ほんやり何も考えず過ごしてしまうことが多い」と「自信・プライド・安定性」の質問項目「何をやっても駄目だと思う」は2回目の平均値は1回目より低い値を示した。

2. 自己教育力4側面の平均的および標準偏差

4側面の各々の平均値(±標準偏差)を表2に示す。自己教育力を構成する4つの側面において、成長・発達への志向>自己の対象化と統制>学習の技能と基盤>自信・プライド・安定性、の順番で平均値は1、2回目ともに高かった。しかし、2回目の平均値(±標準偏差)は1回目より4側面ともに低下した。

3. 自己教育力4側面と筆記試験の結果との関連

自己教育力4側面と小テスト、期末試験および小テストと期末試験を合算した点数との関連を表3に示す。2回目の調査結果において自己教育力の自信・プライド安

定性の側面と小テスト(前期実施)の総合点と関連(r=0.271)を認めた以外、他の側面と試験結果との関連は認めなかった。

4. 側面Ⅳ「自信・プライド安定性」の下位項目と小テストの結果との関連

自己教育力の側面Ⅳ「自信・プライド安定性」の10の下位項目と小テストの総合点との関連を表4に示す。側面Ⅳの「自信・プライド安定性」の質問項目のうち、「自分のやることに自信を持っている方だと思う」の項目(r=.291)と関連を認めた。

考察

2年次生に前期2回実施した自己教育力について考察を行う。ただし、今回は中間評価であることを踏まえ、自己教育力の4側面に関して考察を行うこととする。

1. 自己教育力について

本学は1年次、共通科目を中心に履修し2年次より専門教育科目の履修を中心としたカリキュラムである。従って、専門教育科目である基礎看護共通技術・基礎看護技術は2年次より履修する。今回、基礎看護共通技

術・基礎看護技術を履修している学生を対象として実施した自己教育力の調査では、自己教育力の4側面の平均値において、側面Ⅰ「成長・発達への志向」は1、2回とも平均値は最も高く、側面Ⅳ「自信・プライド・安定性」は1、2回ともに最も低い平均値を示し、多久島ら⁹⁾南¹⁰⁾の報告と同様の結果を示した。

側面Ⅰ「成長・発達への志向」は自分自身の行動や技能の領域やレパートリーが、より広いもの、より高度なものとなるよう願う、といった構えを持つことである⁵⁾。1、2回の調査結果において最も高い平均値を示したことは、道廣ら¹¹⁾が看護大学生を対象とした調査結果と一致している。これは、「成長・発達への志向」は、看護学生にとって援助の基礎となる看護技術を学び、看護職者を目指し成長していこうとする動機や意欲の表れであるということが読み取れる。

側面Ⅳ「自信・プライド・安定性」は、自信を持っているかどうか、プライドをもっているかどうか、心理的に安定しているかどうかを評価することである。前述した南ら¹⁰⁾は成人看護学実習を履修した3年次生を対象とし調査を行っている。座学と実習という学習形態に違いはあるが、学生が青年期でありアイデンティティを確立する発達段階である点においては共通していると考えられる。初めて学習する「基礎看護技術」を習得する過程や、慣れない実習の場において、講義・演習や実習に高い学習意欲を持ち臨んだものの、学習不足やイメージ通りに実施できないことから自信を失い、学習意欲を低下させていることが考えられ、「自信・プライド・安定性」に揺らぎが生じていることが推測される。また、道廣ら¹¹⁾が述べているように、「自信・プライド・安定性」は自己を肯定的にとらえているかであり、看護学生の自尊感情の低さと青年期という特有の心の揺れなど心理的な面が自信の低さにつながっているのではないかと考えられる。よって、「基礎看護技術」の科目に関わる教員は、学生が将来自分の目指す看護師像を描くことができ、今何ができるようになったのか自信を持ち学習意欲を高めることができるような講義、演習内容を組み立てていくことが必要と考えられる。

側面Ⅱ「自己の対象化と統制」は、自分自身の現状と可能性、課題等を認識し、自分自身が選びとった方向へ自身が近づくよう働きかけるという能力である。2番目に平均値が高い結果を示した。看護技術を学習することで、看護師になるという目標を明確にしていることが推測される。また、側面Ⅲの「学習の技能と基盤」は、「学び方の知識と技能」を身につけるということと、「基本的な知識・理解・技能」を修得するという2つの視点から見る必要がある。側面Ⅲの「学習の技能と基盤」は、大学教育において直接育成される技能でもある。基

本的な知識・技術をきちんと修得できているか考えることが必要であり、学習によって獲得していく要素が強い¹¹⁾。このことは、看護技術の教育の在り方が大切であり、教員は授業の組み立て、演習の方法などを常に考える必要がある。学生の反応から、教員も教授内容、方法を振り返り、学生にとって最適な学習環境を提供できているかを考えることが重要である。

自己教育力の4側面の平均値を1回目と2回目を比較する。側面Ⅰ「成長・発展への志向」、側面Ⅱ「自己の対象化と統制」、側面Ⅳ「自信・プライド・安定性」において、2回目より1回目の平均値が高いという結果であった。しかし、側面Ⅲ「学習の技能と基盤」は1、2回目とも平均値に差は見られなかった。基礎看護技術の講義・演習の内容は、進路が進むにつれ、複雑化・高度化していく。つまり、修得しなければならない内容は、難易度が高くなるため、看護技術を学びこれから看護学生として成長していけるのだろうか、目標に到達できるのだろうか等の不安が生じていることが予測される。一方、1、2回目の平均値に差を生じていない側面Ⅲの「学習の技能と基盤」は、知識・技術を修得しようとする気持ちは変わらず持つことができていると考えられる。

2. 自己教育力と小テスト及び期末試験との関連

自己教育力の側面Ⅳの「自信・プライド・安定性」と小テストの結果のみに有意な関係性を認めた。さらに、側面Ⅳの10項目と小テストの関連性を分析したところ、「自分のやることに自信を持っている」の質問項目と有意な関係性を示した。「自分のやることに自信を持っている」の項目と関係性があるということは、学生は事前課題学習をしっかりと行っている、授業を受講する準備はできているという気持ちが反映された結果ではないかと考えられる。

梶田⁵⁾は、「自信・プライド・安定性」の側面は、他の3つの側面を支えるものであり、自信を持っているかどうか、プライドを持っているかどうか、心理的に安定しているかどうか、によって人は主体的であるかどうか決定されると言っても過言ではない。」と述べている。課題が提示された事前学習とはいえ、学生個々のノートに学生はしっかりと学習している、主体的に学習できているという満足感の表れではないかと考えられる。学習したことが小テストに出題され、点数化されることで学習の動機づけとなっていると考える。従って、小テストは自己教育力を高める要因となり得ることが示唆された。

3. 問題点と今後の課題

調査結果から、前期における自己教育力を高めた要因

として関係性が明らかになったのは小テストであり、それは側面Ⅳ「自信・プライド・安定性」の中の「自分のやることに自信を持っている方だと思う」の1項目のみであった。

学習意欲は自己教育力の重要な背景要因であると森ら¹²⁾は述べている。小テスト・期末試験は形成評価である。そして自分が学習して得た知識がどの程度、修得できているかを確認するものであり、知識の修得を喜び、学習意欲を高めるものであると考える。ただし、テストの成績だけが自己教育力を高めることができるということとはあり得ない。しかしながら、学習意欲を高める1つの背景要因となり得る。自己教育力の側面Ⅲ「学習の技能と基盤」は、学校教育で直接的に形成される具体的な形での学力である。それには、前述したように「学び方の知識と技能」の視点と、「基礎的基本的な学力」の視点で構成されている。学習によって獲得していく能力であるが、小テスト及び期末試験との関係性を認めなかった。これは、看護技術を修得するには知識の獲得が基盤となることを学生に認識させることが十分とは言えなかったのではないだろうか。学習により得た知識は技術修得の過程のどの部分に活用できるのか、また、知識を活用することで援助にどのように役立つのか等、事前課題学習で得た知識と援助を関連させ、援助をイメージしながら回答できるような小テストの出題方法の工夫が必要ではないかと考える。学習したことが点数として評価されることも、学習意欲を高めることができるため出題方法の工夫が必要ではないかと考える。

自己教育力は先述したように、自ら学び自己成長をさせていく力である。常に学生自身が学習への手ごたえや目標をもって学習ができるよう、教員は教授内容を精選し検討していくことが必要であり、学生のレディネスに応じた「仕掛け」を工夫していくことで、学習意欲を高めることができるように努力が必要であると考えられる。

結論

基礎看護技術を履修する2年次生を対象に実施した自己教育力の前半期の結果は以下の通りであった。

1. 自己教育力は、側面Ⅰ「成長・発達への志向」、側面Ⅱ「自己の対象化と統制」、側面Ⅲ「学習の技能と基盤」、側面Ⅳ「自信・プライド・安定性」の順で平均値が、高い値を示した。
2. 側面Ⅲ「学習の技能と基盤」は1回目と2回目の平均値は変化を認めなかったが、他の側面の平均値は1回目より2回目の方が低い値を認めた。
3. 自己教育力を高める要因は、小テストであり、側面Ⅳ「自信・プライド・安定性」の中の「自分のやるこ

とに自信を持っている方だと思う」の項目と有意な関係を認めた。

おわりに

本研究は基礎看護技術を履修している学生を対象に調査を実施しており、自己教育力と併せ「学習活動自己評価（演習用）」の調査表も用いた調査を実施している。また、演習終了後、学生はリフレクションシートの記述を行い、演習で自ら経験したことから直接学ぶ力を養い、かつ学習課題を明確にしなが、看護実践に必要な「行為のなかのリフレクション」を行う力を養っている。

今後は、これらのことを総合的に検討することで、自己教育力を高め、看護実践能力の素地ができるための、授業・演習の精選、組み立てを行いたいと考える。

謝辞

本調査にご協力いただきました、保健学科看護学専攻の2年次生に深く感謝いたします。

引用文献

- 1) 安ヶ平伸枝, 菱沼典子, 大久保暢子, 他: 基礎看護担当教員のとらえる学生の特徴と教授学習方法の工夫, 聖路加看護学会誌, 2010; 18: 53-58
- 2) 山口さおり, 今村圭子, 松成裕子, 他: 基礎看護学領域における看護技術の教育内容の精選, 鹿児島大学医学部保健学科紀要, 2016; 26: 83-92
- 3) 今村圭子, 山口さおり, 松成裕子, 他: 基礎看護技術における学生の能動的学習方法の転換へ向けての支援の取り組み, 鹿児島大学医学部保健学科紀要, 2016; 26: 115-12
- 4) 中俣直美, 山口さおり, 八代利香, 他: 看護基礎共通技術, 基礎看護技術における演習協力体制について, 鹿児島大学医学部保健学科紀要, 2016; 26: 123-130
- 5) 梶田毅一: 自己教育への教育, 明治図書 東京, 1985
- 6) 沼口郁子, 岡田正美, 加藤和子, 他: 看護学生の自己教育力と学習への動機づけとの関連, 愛知県立総合看護専門学校紀要; 2017; 11: 12-20
- 7) 松澤洋子, 鈴木恵美子: 看護大学生の自己教育力に関する研究—自己教育力の学年による違いと卒業後の進路決定—, 2013; 6: 19-26
- 8) 西村千代子, 奥野茂代, 小林洋子, 他: 看護婦の自己教育力—自己教育力測定尺度の検討—, 日本赤十字社幹部看護婦研究所紀要, 1995; 11: 22-39
- 9) 多久島寛孝, 山本勝則, 弓掛和江, 他: 自己教育力に影響を及ぼす要因の分析, 保健科学研究誌,

2001 : 3 : 49-60

- 10) 南修子, 園田麻理子, 七川正一, 他 : 成人看護学実習における学生の自己教育力に影響する要因の検討, 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要, 2006 : 10 : 26-36
- 11) 道廣睦子, 藤田佳子, 浅井美穂 : 看護大学生の自己教育力に影響する要因—ローカルオブコントロール, ストレス耐性, 高校時代の委員会活動の影響—, 宇部フロンテァ大学看護ジャーナル, 2008 : 1 : 1-8
- 12) 森敏明, 石田潤, 清水益次, 他 : 大学生の自己教育力に影響する要因は何か—学習目標, 原因帰属, セルフエフィカシー, および暗黙の知能観の影響—, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 2001 : 50 : 1-8

Factors affecting Student Nurse's Self-Education Ability and Relations between Basic Nursing Skills and the Examinations

Keiko Imamura¹⁾, Saori Yamaguchi¹⁾, Naomi Nakamata¹⁾, Kumiko Tanaka¹⁾, Yuko Matsunari¹⁾

1) Department of Fundamental Nursing School of Health Medicine Kagoshima University
School of Health Medicine Kagoshima University 8-35-1, Sakuragaoka, Kagoshima City 890-8544, Japan

Address correspondence to: Keiko Imamura, 8-35-1, Sakuragaoka, Kagoshima City 890-8544, Japan
Tel/Fax: 099-275-6809
E-mail: keiko-21@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

Abstract

In this university, in the second school year of the nursing program, the courses of Common Fundamental Nursing Techniques for 30 hours and Fundamental Nursing Techniques for 60 hours are available. These courses are implemented by ensuring the content that should be taught in fundamental nursing science, understanding the current situation of students, always carefully selecting the teaching content of nursing techniques and encouraging the conversion to an active learning attitude by introducing short tests for the purposes of review and preparation, and the demonstration of prior learning and presentation of exercises by the students. Little by little, the students' learning attitudes are changing.

The details of the system are as follows. Based on the above learning system, in order to develop their practical nursing ability, students attending the courses of Common Fundamental Nursing Techniques and Fundamental Nursing Techniques undergo self-evaluations of their learning activities and self-education ability successively, and their learning conditions are visualized. Through this process, the students gain the opportunity for self-reflection. As a result, they can nurture their self-education ability as well as cultivate the foundation of nursing practice ability. For this purpose, self-evaluations of their learning activities and self-education ability are scheduled four times a year. At present, the 2nd implementation has finished.

Self-education ability is defined by Kajita as "the ability to study, grow and develop by oneself". An comparison analysis was conducted of the evaluations of self-education ability, which students underwent twice as intermediate evaluations, with the results of short tests conducted twelve times, and the results of the final examination in the previous semester, and it was suggested that the short tests are the most important factor for the promotion of self-education ability.

Key words: Self-education ability, fundamental nursing technique, nursing student and short test